
勇者やるのもラクじゃない

はぴこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者やるのもラクじゃない

【Nコード】

N9458N

【作者名】

はぴこ

【あらすじ】

おとぎ話の勇者さまは、姫とハッピーエンドなるはずなのに
実際そんなに甘くない！

一瞬の油断が命取り。真の敵は目覚まし時計？

目覚まし時計でショック死しちゃった勇者さまと

2代目勇者（になる予定）の新米君が、魔王退治の冒険旅行。

魔神のような姫さまと、結婚しないと成仏できない？！

果たして新米君は、生きて帰ってこれるのか。

事実は小説より喜なり

おとぎ話の絵本がありました。

昔むかし、グリーンランドという国に、一人の美しいお姫様がいました。

ある日、恐ろしい魔王が現れ、お姫様をさらっていくと、国じゅうに魔物たちがあふれ出しました。王様は、皆におふれを出しました。

『姫を助け、魔王を倒した者に、姫とこの国を与えよう。』

世界中の冒険者が、魔王の城に立ち向かいました。

しかし、魔王を倒すことはおろか、姫を助け出すこともできませんでした。

そんなとき、白銀の鎧を着た、伝説の勇者が天空から現れ、たくさんの仲間たちと共に、魔王に立ち向かいました。

戦いは七日七晩続き、仲間たちもひとりまた一人と倒れていきました。

勇者は、魔王との最後の一騎打ちで、見事魔王を倒し、お姫様を助け出すことができました。

世界に平和がおとづれ、無事に仲間たちとお城へ帰ると、勇者は姫と結婚し、何時までもしあわせにくらしました。

おしまい

というのが世の中に知れ渡った有名なお話。

でもね。

この話にはもう一つ、別のお話がありまして。。。

それでは、再現VTRスターーーー！！

見事魔王を倒し、姫を救った伝説の勇者さまは仲間たちと共に、無事お城にもどることができました。

その夜。お城では勝利と無事な帰還を祝って大宴会です。

宴会は、夜遅くまで続きましたが

明日はいよいよ、お姫様との結婚式。

主役の二人は明日のためにと、自分の部屋に戻って早めに休むことにしました。

実は、この日を本当に楽しみにしていた勇者さまは
一世一代の大切な日に、寝坊をしてはいけないと

枕元に、冒険中に仲間の魔法使いにもらった目覚まし時計をかけて眠りました。

何度も時間をチェックして、セットするとこれで安心。

朝まで一度も目覚めることなく、ぐっすりと眠りについたのでした。

チツチツチツチ。。。部屋には目覚まし時計の針の音だけが響きます。

（時計の裏側）

商品名「マジックアラーム」

今年一番のおすすめ商品は、どんなに深い眠りにっているモンスターや、

眠りの森のお寝坊さんなお姫様も、たちどころに目を覚ますという画期的なマジックアイテムです。

冒険中に、ついうつかり眠らされてしまったあー！っという冒険者さんも、これさえあればもう安心！

たちどころに目をさまし、勝利することまちがいなし！、冒険の際には是非どうぞ。

＊使用上の注意

冒険中以外の、普段用目覚まし時計として使用するのはおやめ下さい。

効果が強すぎて、永遠の眠りについてしまうかもしれません。なお、このアイテムによっての事故等のクレームに関しましては当店は責任を負いかねますのであしからず。

マジヨラム魔法商店

幸せな生活を約束された、朝がきました。

小鳥たちの声で目を覚ましたお姫様は

窓から差し込む朝の光を浴びて、にっこりと微笑んでいました。

その時、勇者さまの部屋からけたたましい目覚ましの音と

勇者様の叫び声が聞こえてきました。

哀れ勇者は愛する姫と結婚することなく、目覚まし時計の音による

「心臓発作」で、ほんとに永遠の眠りについてしまったとき。

嘘のようなほんとお話。

ちゃん)

アーメン (ちゃん

「ハーーーーッハッハッハッハッハ！！！！」

愚かな人間どもめ！

わざわざこの美しい魔王様にやられにくるとは、
なんと哀れな生き物だろう！

約束通り、この美しい姫はもらっていく！

死ぬ前に、この私の美しさを、存分に目に焼き付けるがいい！

！！

ハーーーーッハッハッハッハ！！！！」

そういうと、ひととき大きな風が吹き、

次の瞬間、魔王と姫の姿は消えてしまいました。

あたりが明るくなると、兵士たちの驚きの声が上がりました。

その場にいた、強者や冒険者達が一人残らず石になっていたのです。

「姫があ。姫があ。。。。」

王様が、がつくりと膝をつくとき王様の傍にいた王女様がかけよって、
、、つて。。。え？

「ひ、、、姫?!」

王様の後ろには、美しいドレスを着たお姫様が、
うつむいたまま、肩を震わせて立っていました。

「えっえっ???」

王様も家来たちも何が何だかわかりません。

タイミングがいいんだか、悪いんだか

トイレから戻った新米さん。

広間の光景を見てびっくりです。

いかにも、か弱いお姫様という感じで
半ば強引に、さらわれようと待っていたのです。

コッソリ『ア〜レ〜』というセリフまで練習していたのは秘密
ですが。

乙女心を踏みにじられたお姫様。

その怒りは半端なものではありません。

「あのクソ魔王。。。殺〜〜〜〜ス!!!!」
我を忘れて、暴れまくりです。

このままでは石になった冒険者たちだけでなく、
お城まで壊されそうな勢いです。

「だ、誰か、姫をとめてくれえ〜〜〜。そうじゃ!そこのお主
!」

指さす方向には、新米さんが。

「えっ。オレ??」

「そうじゃ!お主じゃ。おぬしも冒険者の端くれだろう。ひ、姫
をとめてくれ!!」

止めてくれたら、褒美をやろう!!」

可哀相な新米さん。無理矢理お姫様の前に放り出されてしまいま
した。

王様たちは、柱の陰で、どこから出したのか、小さい旗をパタパ
タ振って

隠れています。

まるで暴れるモンスターと、怯えるうさぎさんのようです。

新米さんは、仕方なく勇気を振り絞って姫様に話しかけました。

「あのお。。お姫様? そんなに怒ると、綺麗なドレスが台無し
ですよ?」

姫の動きがピタッと止まった。

「さらわれなくてよかったじゃないですかあ。

もしさらわれてから、間違えたあ☆多とか言われちゃったら、目もあてられませんかよおw」

新米さん、ものすごく一言多いです。

「貴様、、、あのガチホモ魔王の手先かああああ!!!!!!」
火に油、お姫様に新米さん。

パワーアップした姫は、折れた石柱を軽々と抱えあげると
新米さんに向かって、思いつきり放り投げます。

誰もが、もうダメだあとと思った瞬間。

新米さんは光に包まれ、白銀の鎧を着て飛んできた石柱を
粉々に砕いてしまいました。

何だか滅茶苦茶カッコイイです!

その様子に、鬼のように激怒していた姫も気が抜けたようになり
皆が新米さんに注目しています。

光が消え、元の新米さんに戻ると
王様がつぶやきました。

「勇者じゃ。。。伝説の勇者が現れた。。。。
お主こそ、伝説の勇者の再来じゃあ!」

一斉に歓声が湧き起こり、なんとか一件落着?したのです。

その夜、新米さんは「勇者の部屋」というところに、無理やり泊
まることになりました。

ずいぶん使っていないようで、多少誇りっぽかったのですが、
疲れていたので直ぐにウトウトし始めました。

「おい。。。。オイ、起きろ。。。」

誰かの話し声が聞こえます。

「起きろって。。。。起きんかコラァ!!!!!!」

いきなり何かが頭に落ちてきて、新米さん、痛さで目を覚ましました。

「やーっと起きたか、このタコめ」

何が起こったのかわからないまま、痛さで頭を抱えている新米さんの目の前に、

オレンジ色の。。。。まあるい物体が、フヨフヨと浮いていました。

(タコぱいのにタコって言われてしまった・・・)

いや、ショック受けるところが違いますよ、新米さん。

「さっきの騒ぎのとき、もう少しでペツチャンコだった所を、オレが助けてやっただろう？」

まあるい物体は、そういうと、細長い触覚?のようなものを新米さんの頭にくっつけ、その時の様子を再現VTRのように見せてくれました。

(石柱がぶつかる瞬間、オレンジ色の光が、体に入ってきて、よろい姿に変身して、、、、)

うわ、体のなかに入ってきたの? (気色い) ゴンッ

突然どこからか新米さんの上にタライが落ちてきました。

「助けてやったのに、なーにが気色悪いだ。この恩知らずが。」

オレンジ色の物体が、怒って赤くなりました。

「いや、ごめんよ。助けてくれたんだよね。ありがとう。」

(てかこの状況で取り乱さない俺ってすごい)」

「ゴホン。わかればいい。たまたまお前とは波長があつたみたいでな。」

憑依して、あの姿のなったってことは、どうやらお前には、多少勇者気質があるらしい。どうだ。お前勇者になってみるきはないか。」

勇者にスカウトされている新米さん。

「・・・・・・・・・・ヤダ。」

あっさり断ってしまいました。

「なぜ、どうして、Why??？有名になるチャンスだぞ?」
焦るまるい物体。断わられるとはおもってなかったようで。

「別に、ご飯が食べれるだけ稼げればいいし、面倒だし・・・。
有名にもなりたくないしい。」

「おいおい。欲がないなあ勇者になって、魔王を倒せば姫と結婚
してこの国の王に

なれるんだぞう?嬉しくないのか?」

「・・・・・・・・・・絶対ヤダ。」

(エエエエエエツ)

丸い物体さん、困っています。青くなったり赤くなったり。

「だって。。。お姫様って、さっきのあのひとだろう?」

二人?の記憶に、あの恐ろしい光景が浮かび上がります。

「あんなお姫様と結婚なんかしちゃったら、一生尻に敷かれて、
ビクビクしながら暮らさなきゃいけないよお。」

大金持ちになったとしても、そんな生活はいやだよお。
確かに。

「それにさ、魔王を倒すなんて、俺にできっこないだろう。」

この間「アルバイトニュース」見て、なった冒険者だぜ?」

「そのことな〜〜ら、心配するな。この伝説の勇者のオレが、
みっちり鍛えてサポートしてやる。」

アフターケアも、バッチリだ。

って、なんでまた寝るんだあ!」

新米さんは、もそもそとベットに戻ろうとしています。

「冗談は、その姿だけにしといてよねえ。」

「じょうだんなどではなあ〜〜い!」

俺は本当に伝説の勇者だったんだ!

嘘だと思ふなら、これをみろ!

再現VTRスタアーーーーー！」

最初に見たVTRが流されています。

あ、一度おみせしたので、ここカットで。（オイオイ）

「目覚まし時計でショック死。。。。意外とどんくさいな。」

「ほっとけえ！！！」

「とにかく、やっと出会えたこのチャンス！お前が勇者となって魔王を倒し、姫と結婚してくれないと、俺、この先ずくずくつと

成仏出来ないまま、さまよっちゃったりしちゃうんだよお。

元勇者助け、幽霊助けと思って協力してくれくくく」

「だからあ、あの姫様と結婚とか、いやだってばあ。」

「付き合ってみたら、意外といい子かもしれないじゃないか！」

「つきあうも何も、相手の気持ちとかもあるだろうし。」

「そんなの、既成事実つくっちゃえばこっちのもんだ」

「なんだよその既成事実って！ありえないからちよつと。」

「協力してくれなきゃ、末代まで崇るぞくくく」

「勇者のくせにおどしかよ！てか、ほんとにユーレイだったんだなあ」

「さっきからそういつてるだろうが」

「とにかく、嫌なものはいやだくくく」

「そんなこといわずにくくく」

という話が、結局朝まで続き。。。。

寝不足で、目の下にクマができたままの新米さん。

朝早くから、王様に呼び出されました。

「昨日はご苦勞であった、勇者殿。」

「いや、オレ勇者じゃないっすから。。。」

「またまたまた。そんな謙遜を。伝説の勇者の装備、

『白銀の鎧』を身に着けて、あの大きな石柱を破壊された力。

あれこそ、まさに勇者の証し。誠に見事であった。」

「……………（いやいやいや、あの石柱投げてきた、あんたの娘のほうがいって）」

「そこだ。。。ゴホン。」

折り入って勇者殿に、おねがいがあるのだ。」

「（そら来た）お断りします。」

すかさずキッパリ断る新米さん。流石です。

「まだわしは、なにもいっとらんのだが……………」

「勇者なんだから、魔王を倒しに行けっていうんでしょ。」

「そ、その通りじゃが。。。。」

「オレ、勇者じゃないんですってば。たまたまあのときは、

伝説の勇者の霊って言うのに、取り憑かれてただけで、」

「お。。。お願いじゃあ！！勇者殿。さらわれたフィリップは、

王子にしておくのはもったいないほど美しい子で、

目の中に入れても痛くないほど可愛い子なんじゃあ。。。

魔王を倒せとまではいわん。せめてフィリップだけでも無事に

助け出して来てくれ。。。。」

「そんなこといわれても……………（なにこの王様、きもいよ）」

目をウルウル潤ませて頼む王様に、ドン引きです。

「フィリップを助けるだけだなんて、何甘っちゃろいこと言うて

るの、お父様！」

広間のドアを蹴破って現れたのは、屈強な冒険者スタイルをした、たぶん、昨日のお姫様。。。です。

背中に背負ってるのは、特注のジャイアントアックスみたいです
ねえ。

「！！（げえええ！でたあ）」

王様と新米さんの心の声が聞こえたような。

「あんなド変態ガチホモナルシスト魔王は、細胞のひと欠片さえ残さないように、駆除するのが一番なのよ。」

背中の斧を振り上げ、床に下ろすと、メリメリメリッともものすごい音を立ててめり込みます。

「この私が、直接行つて、退治してきてあげるから、安心して頂戴。」

(あわわわわわわ)

「王様、よかったですねえ。姫が行ってくれるみたいですよ。それでは俺はこれで〜」

あ、新米さん、この隙に逃げようとしています。

急に、目の前に斧が飛んで来て。ドォーーンッ

あゝあ。新米さん、腰をぬかしてしまいました。

「どこへ行く？ お前も来るんだ。」

「い。。。いやあ。。。俺、新米だし、LV1だし、足手まといにしかありませんって。。。」

(し、死ぬ。。。殺される。。。)」

「昨日のあの一撃、たいしたものだった。」

お前には、何かしら戦闘センスのようなものがあるのだろう。

鍛えがいがありそうだ。

それと、昨日ので、お前のLVは2に上がってるぞ。私のおかげだな。

役に立たなくとも、荷物持ち位はできるだろう。」

(ひいひいひい)

ここぞとばかりに、王様が後押しします。

「そ、そうじゃな、勇者殿がご一緒してくださいましたら、安心だ。年頃の姫を一人でいかせるなど、とてもできぬ。」

(姫を一人で行かせたら、フィリップを助ける前に、魔王の城ごと

吹っ飛ばしかねんわい)」

王様、悪いです。

(大丈夫だから、この人一人でぶっ飛ばしてこれるって！

一緒に行く俺の方が、俺の身が危険だ!!!)

「それにだ、無事に戻ってきた暁には、勇者どのの、望みのものを差し上げよう。」

例えば。。。。姫と結婚、とか」

「お父様!!!!!!」

「はいいいっ!!」

「娘を褒美の品にしようとは、どういうおつもりですか!!!!」
お姫様、殺気が出てますよ。

「そ、そうですよ、王様。。。はは。。。 (絶対売れ残り防止策にしようとしてる~~~~)」

「じゃ、じゃがな姫、おとぎ話にもあるじやろう、勇者殿と、
姫は、

最後に結ばれてハッピーエンドつと言う話が。」

今にも噛みつきそうな様子の姫が、ぴたっととまった。

「おとぎ話のお姫様と、勇者様、ハッピーエンド。。。いいかも。」

(ええええええええええ!! よくない! ちつとも良くないです!
!!)

新米さん、ご愁傷様です。

「そうと決まれば、さっさといくよ! お父様。必ずや、あの
野郎をぶったおして

既成事実作ってかえってきますわ! たのしみにしててください
ね~~~~w w」

(い~~~~や~~~~だ~~~~~~~~)

姫に襟首を掴まれたまま引きづられるように、旅立っていく新米
くんでした。

白いハンカチを振りながら見送る王様。

「勇者殿~~~~。必ずフィリップを助けて帰ってきてくださいね
~~~~( ; w ; )」

どんどん小さくなっていく二人を追うように、オレンジボールも  
飛んでいくのでありました。

次回に続く。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9458n/>

---

勇者やるのもラクじゃない

2010年10月9日03時42分発行